

特別展 「古代メキシコ —マヤ、アステカ、テオティワカン」

東京国立博物館・平成館(上野公園) 23.06.16~09.03 福岡・大阪 巡回



メキシコには「35もの世界遺産」があるが、なかでも人気を誇るのが「古代都市の遺跡群」で、紀元前15世紀~16世紀のスペイン進攻まで、3千年以上にわたり、多様な環境に適応しながら数々の独自の文明が花開いた。

本展は、代表的な3文明「テオティワカン、マヤ、アステカ」の順に焦点を当て、展示されているが決して別個に紹介されるのみではなく、展覧会の冒頭では、夫々の文明に共通するキーワードを紹介するとともに、交易範囲の広さや、文明同志の関係性にも適宜話題が及ぶものである。

《死のディスク石彫》 テオティワカン文明 300~550年 太陽の広場出土
これまで日本では紹介されることが少なかったテオティワカン文明の出土品は、太陽・月衣・羽毛の三大ピラミッドからの出土品が目白押しである。

《赤の女王のマスク・冠・首飾り》 マヤ文明7世紀後半 バレンケ神殿出土
注目は、「マヤ文明」(1469~86年)では代表的な都市国家バレンケの通称「赤の女王」墓の出土品が、メキシコ、アメリカ以外では初公開されることで、この赤の女王は、バレンケの黄金時代を築いたバカル王の妃といわれ、マスクをはじめ、埋葬の際に身につけていた品々が展示されている。

《鷲の戦士像》 アステカ文明 1469~86年 テンブロ・マヨール鷲の家出土
現在のメキシコ市街地に埋められた都・テノチティトランの大神殿から出土された優れた彫刻作品に、近年発見されたばかりの黄金の奉納品の展示。

他に古代メキシコの至宝《チャクモール像》(マヤ文明)、《嵐の神の壁画》(テオティワカン文明)、《鷲の戦士像》(アステカ文明)などの出土品「約140点」が集結しているため、世界遺産の魅力を体験できる展示空間を楽しめる。



チャクモール像



嵐の神の壁画